

サンテンイチイチ

3.11と石牟礼道子の 芸能世界



田中 優子



石橋 敬子



山村 楽千代



浅井 文義



八田部 鉄



第一部

お話

『死者と生者をつなぐ芸能の役割』 田中 優子

鼎談

『3.11と石牟礼道子』 藤原 良雄
赤坂 真理
笠井 賢一

朗誦

『花を奉る』石牟礼道子詩 笠井 賢一
尺八 設楽 瞬山

第二部

仕方語り

『流れたり』宮沢賢治詩 茅根 利安
琵琶 岩佐 鶴丈

じょろり

浄瑠璃 浄瑠璃 石橋 敬子
尺八 尺八 設楽 瞬山
地歌三味線 佐藤 岳晶

新作地歌舞

『黒髪』石牟礼道子作『椿の海の記』の詩より 山村 楽千代
語り 坪井 美香
笛 設楽 瞬山

新才能舞

『祈るべき 天とおもえど
天の病む』石牟礼道子句 節付・作舞 浅井 文義
能管・オーケラウロ 設楽 瞬山
琵琶 岩佐 鶴丈

一人芝居

『苦海浄土』石牟礼道子作 八田部 鉄
第四章「天の魚一九竜権現さま・海石」より けん 設楽 瞬山
垣 (中国古代土笛)

2023年3月11日(土) 17:00開演(30分前開場)

会場: 銚仙会能楽研修所 入場料: 4,000円(自由席) 共催: アトリエ花習/藤原書店

鎮魂と再生の祈り

一輪の花の力としての詩の力・声の力・舞の力

チッソによる水俣病事件と福島原発事故は、ともに国策的に進めた結果の人災であり、国はその被害の全貌を隠蔽し続け、救済はなされてない、と石牟礼道子さんは訴え続けていました。

3月11日は石牟礼道子さんの誕生日です。石牟礼さんが亡くなって5年、日本も世界も終末的な様相を呈しています。戦争の危機が煽られ、防衛費の増額が声高になされ、あろうことか震災復興費を転用という声さえ聞かれます。3.11を忘れないということは、垂れ流しと隠蔽、調査と救済を怠ってきた私たちの国を変えていくことです。石牟礼さんは滅びるにしても美しい歌が必要だと鎮魂と再生への祈りを込めた比類のない新作能『不知火』を創作しました。石牟礼文学が凝縮された詩『花を奉る』は3.11の翌月に書かれ「現世はいよいよ地獄とやいわん 虚無とやいわん ただ滅亡の世せまるを待つのみか ここにおいてわれらなお地上にひらく 一輪の花の力を念じて合掌す」と結びました。

第一部 『死者と生者をつなぐ芸能の役割』についての田中優子さんのお話しは、本日の催しの基調となるでしょう。出版文化人として『石牟礼道子全集不知火』を刊行した藤原書店社主 藤原良雄さん、作家の赤坂真理さん、石牟礼作品を演劇化し続ける笠井賢一の鼎談。その締めくりに『花を奉る』の朗誦。

第二部 3.11の115年前の三陸大津波を生々しく描いた宮沢賢治詩『流れたり』の茅根利安による仕方語りから始まります。

浄瑠璃『月に叢雲 花に風』は石牟礼さんの歌と芸能の原点『六道御前』から石橋敬子によって歌われます。

新作地歌舞『黒髪』は、『椿の海の記』の最後の詩「前世の黒髪取りつむぎ、なんの錦か織りあがる…」による山村楽千代の創作舞。

新作能舞『祈るべき 天とおもえど 天の病む』は、石牟礼道子の強烈な詩句「毒死列島 身悶えしつつ野辺の花」「さくらさくら わが不知火は ひかり風」の三句による能役者 浅井文義の謡と舞と音楽。

八田部鉄による一人芝居『苦海浄土』は、石牟礼道子の代表作であり、水俣病を一身に引き受けた胎児性の空太郎少年とそれを育てる江津野爺の物語。「海民の生き方の純度と馥郁たる魂の香り」が描かれます。

苦海と浄土は分かちがたく今も続く。地上にひらく一輪の花の力を念じて合掌。

アトリエ花習 笠井賢一

石牟礼道子 1927年3月11日熊本県天草郡生。詩人・作家。1969年に公開された『苦海浄土—わが水俣病』は文明の病としての水俣病を描いた歴史的な作品。1973年マクサイサイ賞、1993年『十六夜橋』で紫式部文学賞、2011年朝日賞、2002年『はにかみの国—石牟礼道子全詩集』で芸術選奨文部科学大臣賞。新作能『不知火』が東京・熊本・水俣で上演された。藤原書店刊行石牟礼道子全集『不知火』が完結。その後も次々と著書が刊行されるが、2018年2月10日逝去。これからも世界のレベルで重要な作家として読み継がれる存在である。

田中優子 前法政大学総長。専門は、江戸文化研究。2005年紫綬褒章。著書に『江戸の想像力』『江戸百夢』『布のちから—江戸から現在へ』『苦海・浄土・日本—石牟礼道子もだえ神の精神』等多数。鶴見和子・志村ふくみ『いのちを纏う〈新版〉』（藤原書店）に解説を執筆している。2021年7月31日鶴見和子追悼『山百合忌』で講話「着物から見る内発的發展論」。

藤原良雄 1973年新評論入社。81年編集部長に。89年秋退社。90年春、(株)藤原書店を創業。92年第1回「青い麦編集者賞」受賞。97年フランス芸術文化勲章(シュヴァリエ)受章。2018年、フランス文芸最高のアカデミー・フランセーズより「仏語仏文学顕揚賞」受賞(日本人3人目、日本の出版者で初)。21年井上靖記念文化賞特別賞受賞。

赤坂真理 「愛と変容を世界にもたらす」がモットー。アメリカで天皇の戦争責任を問われる少女を通して日本の戦後を鮮やかに描いた『東京プリズン』が反響を呼び、第66回毎日出版文化賞、第16回司馬遼太郎賞受賞。第23回紫式部文学賞受賞。『愛と性と存在のはなし』を出版。

笠井賢一 今尾哲也氏(歌舞伎研究)に師事。歌舞伎俳優八世坂東三津五郎秘書として著作の助手を務める。劇作、演出家として古典と現代をつなぐ演劇活動を、能狂言役者や歌舞伎役者、現代劇の役者たちと続ける。『古事記』から『源氏物語』『平家物語』、近松門左衛門、宮澤賢治、石牟礼道子、新作能まで幅広く演出。アトリエ花習代表。

設楽瞬山 都山流尺八奏者。演劇や語りの音楽として、演劇的な内容に深く添った表現を実現する。若村麻由美一人芝居『小幸相身投—平家物語による』や『千手』、『曾根崎心中』、麻実れいの語り芝居『女院出家』、真野響子一人芝居『夢十夜』、『言魂—石牟礼道子・多田富雄 深き魂の交歓』の音楽など多数。

茅根利安 仙台市を拠点に演劇活動を展開。1999年宮城県芸術選奨新人賞受賞。2011年東日本大震災からの心の復興を目指し『コロノキンセンアワー演劇部』をプロデュース。被災地支援公演や東京、ソウル公演などを行う。昨年仙台と東京で『明治に先駆けた雪国の女二人』に出演。

石橋敬子 能を観世流鶴澤雅、鶴澤久両師に師事し能『船弁慶』、『葵上』などを舞う。石牟礼道子作『六道御前』の一人芝居を鏡仙会能舞台、福岡森本能舞台、熊本真宗寺本堂、水俣オレンジ館などで上演を重ねる。

佐藤岳晶 地歌箏曲を二代米川文子師に師事(芸名:佐藤文岳晶)、長唄を今藤尚之師に学ぶ。西洋音楽と近世邦楽を横断する作曲・演奏活動を行う。石牟礼文学の作曲に、浄瑠璃(不知火—われ、蒼き苦海の底より咲き出で)、箏曲『三日月まじやうけ』、歌曲『アニマの鳥』ほか。劇音楽では『緑亜紀の蝶』『言魂』など。

山村楽千代 山村流地歌舞。東京深川に生れ育つ。六歳で若柳流の踊りの世界に入る。その後、舞の名手といわれた山村楽正に弟子入り、地歌の研鑽を重ねる。江戸の踊りと上方の舞とを共に身に付けた舞踊家として『舞の会』を重ね、江戸前の地歌舞をめざす。

坪井美香 蜷川スタジオを経て、関弘子に師事し「語り」を学ぶ。自ら脚本を手がけ、レパートリーは日本の古典から現代小説まで幅広い。主な舞台『古事記』『竹取物語』、高田宏作『島焼け』、石牟礼道子作『水はみどろの宮』『緑亜紀の蝶』、詩と音楽で綴る竹内浩三『浩三さん』。

浅井文義 鏡仙会所属。観世流シテ方職分。竹谷文一の長男として大阪に生まれる。20歳で上京、観世寿夫に師事、後に八世観世鏡之丞に師事。第30回観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞、『鸚鵡小町』『檜垣』『娘捨』等の老女物を披露。近年は大曲の地頭を勤め高い評価を受ける。

岩佐鶴文 薩摩琵琶を故鶴田錦史に、楽琵琶を宮内庁式部職楽部・山田清彦に師事。1978年NHK邦楽技能者育成会25期卒業。古典曲に加えて現代曲にも積極的に取り組む。1997年『日本琵琶楽コンクール』1位入賞。文部大臣奨励賞、日本放送協会会長賞受賞。

八田部鉄 2012年より劇作、演出家の笠井賢一主宰の能塾、花習塾に所属。塾生たちと共に、古典と現代をつなぐ演劇活動が続ける。『平家物語』『古事記』『賢治曼荼羅』に出演。昨年より石牟礼道子作『苦海浄土』をライフワークとして上演。

2023年3月11日(土)
17:00開演(30分前開場) *19:30頃
終演予定

会場: 鏡仙会能楽研修所
東京都港区南青山 4-21-29
料金: 4,000円(全自由席)
問合・申込: アトリエ花習
TEL 090-9676-3798
✉ mail@atelierkashu.com

